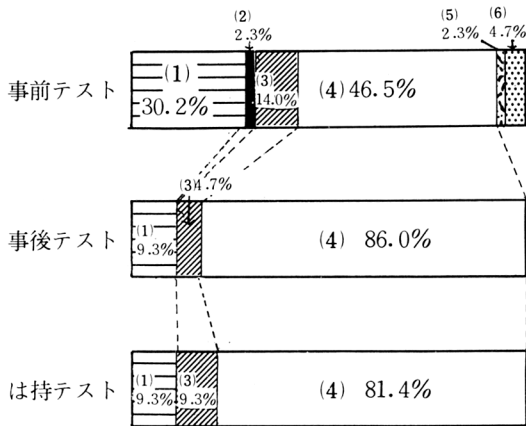


(3) 授業後の個人別学習能力の評価

学習後、1週間で事後テストを、さらに1か月後には持テストを実施し、学習能力の伸びを評価した。3つの重点事項のそれぞれについて以下に示す。

㊦ まくらカバーに適した布地について

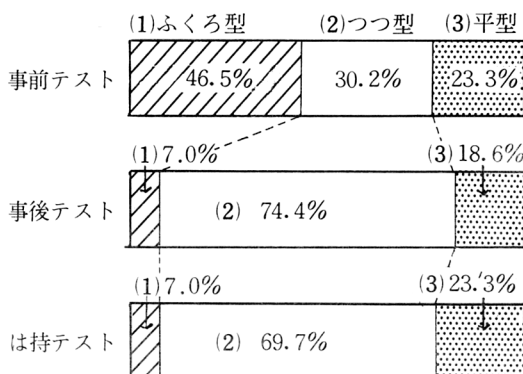
- (1) 綿サラシ (2) ポリエステル (3) 絹
(4) 綿ブロード (5) 毛 (6) ナイロン



(有効度指数 74, は持率 95%)

有効度指数が70以上であり、は持率もよく、指導効果があがっているという結果である。この結果が出た原因として、①既習の洗たく学習でとりあつた布地の性質が定着していた。②グループごとの標本提示がよく、具体的な思考が深められた。③話し合いが活発であり、共同思考の効果があつたなどが考えられる。

㊧ まくらの大きさに合う形



まくらカバーとしては3種とも使われており、どれも誤答とは言えない。しかし、製作にあたっては、使用の目的に合わせて作ることが必要である。ここでは、中身の大きさに合わせて作るためにつつ型をねらいとした。思考するための条件を明示し、ステップを重視してフローチャートを組んだため、無理なく導かれ、理解が深まった。

㊨ 布の大きさの決め方

類型	前提能力	事前テスト	事後テスト	は持テスト	人数の割合%
A	×	○	○	○	22.3
B	×	×	○	×	24.3
C	×	×	×	×	43.8
D	○	×	×	×	9.6

児童の変容を類型化してみると、4つのグループに分けられる。

○Aのタイプは、前提能力はじゅう分でなかったが、学習によって能力が身につく、変容の見られた児童である。

○Bのタイプは、変容はしたが完全に身につけていない児童である。

○Cは、思考のしかたや理解がふじゅうぶんで、能力として身につけていない児童（教師側の反省として、設問のしかたがまずく、わかっていても表現しにくい書き方のもの）である。

○Dは、下降線をたどった児童である。

CとDの原因として考えられることは、①もともとなる大きさの理解が不完全である。②ぬい方のこまかい点までの理解がふじゅうぶんで、寸法のあやまりが多いなどである。

これらの解決の手だてとして、①立体をつつむものとして平面があるのであるから、立体から平面への移行を、布や紙で具体的に操作させながら取り扱う。②どこを、どのぬい方で、ぬいしろはどれだけ、というように具体的な点の指導をすべきであると実践とおし考えさせられた。